

～ピンクリボン通信 No.7～
「分子標的治療薬ベージニオ」

乳腺外科部長 中野 聡子

みなさん、こんにちは。前回のピンクリボン通信から半年間開いてしまいました。

新型コロナの時代になってから、毎日の感染者数を見て一喜一憂というところでしょうか。特にこの第6波（オミクロン株）になってから、あっという間に新記録更新してしまいました。今月からはピークアウトしていると言いますが、また、次の変異株が来るのではないかと疑心暗鬼になります。こんな大変な時代に世界では戦争まで勃発し、心痛は増すばかりです。

さて、今回は少し明るいニュースです。

ホルモン感受性陽性、ハーザー陰性のいわゆるルミナルタイプの再発リスクが高い乳がんに対して、術後補助療法として分子標的治療薬が使えるようになりました。この分子標的治療薬は3年前からルミナルタイプの進行再発乳癌に対して使用可能となったベージニオというお薬です。リンパ節転移が4個以上、あるいは1個から3個のリンパ節転移があり、なおかつ、腫瘍の大きさが5cm以上あるいは、組織学的異型度が高いタイプに対して、従来のホルモン療法に加えて、術後2年間の分子標的治療薬を使うというものです。monarchEという臨床試験では、ベージニオ+ホルモン群がホルモン単独群に比較して、無浸潤疾患生存期間が32%良かったという結果でした。無浸潤疾患生存というのは、手術した癌の再発を含め、手術と関係のない浸潤がんなどが無い状態を意味します。もちろん間質性肺疾患などの重篤な有害事象や多くの方に下痢が認められることもわかっていますので、注意をしながら使用する事が大事です。この治療の適応になる方には、治療のオプションとしてお話をし、利点、欠点についてご相談した上で、より良い結果を導き出せるようにしていきたいと思います。

ようやく春を感じる季節になりました。少しでもみなさんに明るい未来が訪れますよう、そして世界が平和になるように祈っております。